

くしくも、肥後・熊本の戦国武将で築城の名手とされた加藤清正(1562〜1611年)がかかわった二つの名城で、天守閣の再建計画が進んでいる。熊本地震による被害からの復旧が進む熊本城(熊本市)と、市長の肝煎りで木造天守の復元が始まる名古屋城(名古屋)だ。そのほかにも各地で天守閣の耐震対応が進む。それぞれの町のシンボルである天守閣は、どう生まれ変わろうとしているのだろうか。

●無残な姿 衝撃広がる

「美家の被害よりも天守閣が壊れたのがショックだった。熊本県人の多くが同じ思いだったはず」
「探訪 日本名城」などの著作がある城郭研究家の浜口和久氏は語る。本業は防災教育推進協会(東京)の事務局長として学校などでの防災教育を推進する。仕事柄、日本はどこで地震が発生してもおかしくないと理屈では分かっているが、生まれ育った熊本のシンボルが無残に崩れた現実を理解するには時間がかかった。

「地震が少ないとされてきた熊本の常識が根底から崩れた。日本に安全な所はないと痛感した」
昨年4月の地震から1年が過ぎ、現地では熊本城の復旧工事が進む。地震では、江戸時代に建てられた国重要文化財の櫓が被害に遭い、石垣は全体の3割が崩壊した。復旧費用は総額約63.4億円に及ぶ。昨年12月に熊本市が示した復旧基本方針によると、最優先されるのは大小天守の復旧。施工業者によると、概算で7億円かかる。2年後の春には天守の外観は震災前の姿に戻る予定だ。

清正が現在の地に熊本城を築いたのは1607年。その後、細川家によって守られてきたが、西南戦争(1877年)で大小天守や本丸御殿が焼失した。1960年になって市民の念願で現在の3層6階の天守などが再建された。骨格は鉄骨鉄筋コンクリート(SRC)造りだが、外観は古い写真に基づいて往時の姿を再現した。創建当時の建築ではないが、巨大

な石垣に支えられた重厚な姿から「三大名城」とたええられてきた。再建から半世紀以上が過ぎ、耐震工事が予定されていたが、その矢先起きた大地震。復旧に加え、耐震改修が加速することになった。熊本城総合事務所によると、最上階は瓦の軽量化などを図るため、いったん解体して再構築する。全体的なバリアフリー化も進め、内装や展示内容も刷新する予定だ。短期的には復旧だが、中長期的には本格的な大小天守の復元も視野に入っているという。

オピニオングループ 森 忠彦

ニュース解説

「耐震」と「観光」 天守再建

崩れた「熊本のシンボル」進む復旧工事 名古屋は市長の強い意向で「木造復元」



な石垣に支えられた重厚な姿から「三大名城」とたええられてきた。再建から半世紀以上が過ぎ、耐震工事が予定されていたが、その矢先起きた大地震。復旧に加え、耐震改修が加速することになった。熊本城総合事務所によると、最上階は瓦の軽量化などを図るため、いったん解体して再構築する。全体的なバリアフリー化も進め、内装や展示内容も刷新する予定だ。短期的には復旧だが、中長期的には本格的な大小天守の復元も視野に入っているという。

名古屋城では総事業費50.5億円をかけた木造天守の復元が始まる。老朽化対策の一環だ。天守は徳川家康が諸大名に命じた天下普請(土木工革命)によって1612年に完成した。石垣上の高さは約36・1メートル。延べ床面積は姫路城の約2倍もあり、最大級だ。明治以降も存続し、1930年には城郭として初の国宝に指定されたが、45年5月の空襲で炎上した。「もし、焼けていなかったら」という思いが市民の間には根強い。現天守は59年にSRCで復元されたものだが、今回は耐震改修ではなく木造復元となった。「できただけ往時の姿に近づきたい」という河村たかし名古屋市長の強い意向だ。完成は2022年12月の予定。近年のインバウンド(訪日外国人)効果もあって、16年度の城の入場者数は前年度比10%増の約192万人を記録。天守の完成時には366万人近くを見込む。

「熊本城ショック」の影響は他の城にも及んでいる。今月17日には国宝・松本城(長野県松本市)が耐震診断の結果、大地震時に「倒壊の危険性」があることが判明した。国宝・彦根城(滋賀県彦根市)や、太平洋戦争で焼けて戦後に鉄筋コンクリート(RC)で再建された岡山城(岡山市)や和歌山城(和歌山市)も今年度、初の耐震診断を行う。「以前から予定はあったが、熊本の影響で前倒しされた」(彦根市文化財課)

各地に残る天守の大半は、震度6強〜7クラスの大地震でも倒壊しない新耐震基準が盛り込まれた現在の建築基準法(1981年施行)以前の建造物で、耐震対策が進んでいない。文化庁が耐震強化の

通達を出したのは東日本大震災の後だ。「それまで何となく『お城は強じい』というイメージが強かった。ようやく改修が少しすすんで進み始めた(文化庁文化財部状況)」。課題は木材の補強

石」と説明する。
東京の非営利組織(NPO)「江戸城天守を再建する会」も活気づく。江戸城は江戸時代初期まで天守があったが、1657年の「明暦の大火」で焼失して以来、天守台のみの状態となった。再建を目指しているのは徳川家光の時代の1638年に建てられた3代目の「寛永度天守」だ。
「寛永度天守は戦国から続いた天守建築の集大成。戦乱が終わり平和になった時代の象徴でもあり、成熟都市・東京のシンボルになる。税金は使わず民間主導で実施する。20年の東京五輪を機に本格的な議論を進めたい」。同会会員で近著に「始動! 江戸城天守閣再建計画」もある参院議員の松沢成文氏は精神的だ。最大のハードルは、現在は皇居の一部に位置しているため、工事認可を得るのが簡単ではないことだろう。

木造の天守で安全性に問題は無いのだろうか。特別史跡熊本城跡保存活用委員会の委員でもある和田章・東京工大名誉教授(耐震工学)によると、SRC技術を一切使わない純木造の高層建築は建築基準法上も難しく、純木造だと何らかの補強措置が必要になるといふ。2年前に大修理を終えた国宝・姫路城(兵庫県姫路市)では金物補強(金物を接合することによって木造建造物を補強する工法)が施された。一方で、最近は耐久性が強い集成材もあり、巨大な柱や梁にも使える。燃えにくい木材も開発されているという。

「見えない所に鋼棒を使って『見た感じは木造』にするのは可能だ。結局は伝統工法の中にとどめて新しい技術を取り入れるかという議論になるだろう。復古調に走る気持ちも分かるが、清正だって当時の最新技術でより良いものを作ろうとしたはずだ。戦後復興を経て昭和の天守を作った先人たちの情熱も大事にしてあげたい」と和田氏は語る。

●「本物再現」の夢

名古屋の木造復元の取り組みは他城にも影響を与えている。小田原城(神奈川県小田原市)は昨年、RCによる耐震改修を終えたばかりだが、市民で組織する「みんなでお城をつくる会」は木造復元を提唱している。メンバーは「今回の改修は最小限にとどめられた。最上階の一部 木造空間を作ったのは近い将来の完全木造化への布

5/30毎日